

姦通の女

ヨハネによる福音 8:1-11

(そのとき、) イエスはオリーブ山へ行かれた。朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆が皆、御自分のところにやって来たので、座って教え始められた。そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエスに言った。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうか考えになりますか。」イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。イエスは、身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」女が、「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」

説教

きょうの福音は聖書の中ではカッコでくくられています。それはもともとヨハネ福音書にはこのエピソードはなかった、後日付け加えられた箇所だという研究成果によるものです。エエーッと驚いてしまいますが、それが現在の聖書学の結論です。じゃこの姦通の女とよばれているエピソードのオリジナルはなどこに記載されていたんだ、という疑問がうまれます。おそらくルカ福音書にあったものが削除され、ヨハネ福音書に再録されたのだろう、とい

う見解がいまのところ一般的です。だとすれば先週のルカの福音箇所続きとして比較しながら読んでみることもできそうです。

先週の放蕩息子はじぶんの浅はかな行動を後悔して実家に帰ってきます。すると父は怒るところか大歓迎します。それを見たまじめな兄がプンプンする、そこで父は兄を慰め、諭すというお話でした。

きょうは、律法学者たちとファリサイ派の人々が姦通の現行犯で捕らえた女をイエスの前に引き出し、刑の執行（石打による死刑）を迫るところから話が展開します。

罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。（7節）

というイエスの一言で「これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去って」しまいます。そこでイエスもまた女に対して罪に定めない、わたしもまた裁かない、といって女を解放するという話です。

先週と今週の福音の同じところは放蕩息子も姦通の女も両名共に裁かれない、許されるという点です。でも自首したのか、逮捕されたのかという違いがあります。放蕩したという息子は姦通も犯しているかもしれませんが、両名ともに同じ罪を犯している可能性はあります。ふたつのはなしでは男も女も許されています、男だから、女だからという偏見はありません、筋としては一貫して矛盾はありません。しかし全体としては放蕩息子は明るいイメージ、裁かれるシーンがなく、なぜか歓迎されますが、姦通の女はただひたすら暗いはなしに感じられます。それは自首すればまあ多少は明るくてもいいけど、逮捕の場合は暗くて当然って話でもないでしょう。先々週の「実のならないいちじくの木」のとき北風と太陽の童話をひきましたが、放蕩息子は太陽のゆるし、姦通の女は北風のゆるし、とイメージとしては区別できるかもしれませんが。べつの見方をすれば、けっこう聖書は男に甘いのかもかもしれません。

「こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。」石を投げて打ち殺す・・・なんと恐ろしいことでしょうか。しかし、よくよく私自身自分の生活を振り返ると“あの人はこんなことを言った、やった。また、こうしなかった・・・。”と、心の中で呟いたり他の人にぼやいたりしている事が沢山あります。地面に転がっている“石”を投げたりはしていませんが心の中で目に見えない石を、人に向かって投げようとしたことがあります。

「霊性センターせせらぎ、日曜日のみことば」ホームページから引用
自分は石など投げたことがない、石を投げて打ち殺すという暴力は許せない、と感じるのはあたりまえです。でも心の中で目に見えない石を人に向かって投げようとしたことがないか？と問われるとどうでしょう。

ガリラヤの丘でイエスはわたしたちにこう命令しました。

あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。マタイ 5:27-28

このイエスの新しい掟を守ることはできるのでしょうか。誰でも心の中で姦淫するでしょう、そして誰でも心の中で石を投げています。人間には感情があります。それを押し殺すことはできないのです。

「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとり、真ん中にいた女が残った。(7-9節)

もし、この人々の中に姦通の女の夫がいたら、女の息子がいたら、また女の実家の家族、身内のものがいたらどうなっていたのか、身内としての感情をおさえることができたのでしょうか。もちろん、イエスのことばの力ははかりしれないものがあります。その時は女を罪に定めることなく立ち去った、イエスの迫力におしこまれ反発することができなかつたでしょう。でもいったん家にもどったらどうなるか。また許せない気持ちがわいて出てくることはないでしょうか。また、裁かれなかった女が家に戻ったとします。家族のものはその女をどのような気持ちで受け入れることができるのでしょうか。

心の中の石をそっと手放し、石を置くことはできるのでしょうか。

あるときイエスは借金のとえを話されました。1万円の借りを帳消しにされた者と1億円の負債を棒引きにしたもらった者はどちらがより多く感謝の気持ちを持つかというたとえでした。

イエスと二人きりになって残された女はイエスからおことばをいただきます。

わたしもあなたを罪に定めない。（11節）

そのときの女の気持ちを他人がおしはかることはできません。しかし誰よりも深くそして多くの感謝の気持ちに満ちていたことを想像することはゆるされるでしょう。また石を置いて立ち去った人たちも、家に戻って怒りが鎮まり、そしてイエスに感謝した人もいることでしょう。家に戻ってまた怒りが湧き出し、イエスに対するしかえしを執念深く狙う人々もいるでしょう。福音はそんな執念深い人たちに翻弄されるその後のイエスの道行きを詳しく伝えています。きょうから四旬節のおわりの週となります。わたしたち一人ひとりの心の中にある石を真剣に見つめ、そしてその石をそっと地面に置くことができますように。
